

北本城と南本城はいつ頃誰が造ったの？

お城というと、江戸や大坂城のような天守閣があって、水堀や石垣に囲まれた大きなお城をイメージしますが、それは安土・桃山時代以降のもので、それ以前のお城は山や小高い丘に造られた山城でした。

座光寺には北本城と南本城と呼ばれるお城の跡があります。ところがこの二つのお城は、土を盛った土塁や掘り削った堀があるだけで、そのほかに昔の資料は何もありません。たいへん謎の多いお城です。

それでは、どんなお城なのか、その秘密を探ってみましょう。

どこにあるの？

麻績神社と旧座光寺麻績小学校舎の西側後方の山は「本城山」と呼ばれ、北本城と南本城があります。現在、座光寺小学校・児童館・保育園があるあたりが北本城で、麻績神社の裏山が南本城です。

南本城は、尾根全体に造られた城のさまざまな施設が当時の姿のまま多く残っている、県内有数の貴重な城跡です。

城跡にはどんな施設があるの？

南本城には、自然の地形をじょうずに生かした約400年前の山城の遺構（施設の跡）があります。

① 本曲輪、腰曲輪

城の中心である本曲輪はいちばん高いところにあり、大規模な土塁で取り巻かれています。本曲輪のまわりにはいく段も続く腰曲輪があり、簡単に本曲輪に近づけないようにしています。また本曲輪を中心に三方にのびる尾根には小さな曲輪があります。

② 虎口

虎口とは曲輪の出入口のことで、城で一番重要なところ。本曲輪には土塁を伴う虎口が残っています。

③ 堀切、土橋

本曲輪とまわりの曲輪の間は容易に移動できないよ

うに堀切で断ち切られ、断絶された曲輪同士は土橋で

つながっています。堀切は敵がそこから攻め上ってくるように誘導して、迎え撃ちやすいようにも工夫されています。

④ 馬出し曲輪

馬出し曲輪とは、土塁などで人馬の出入りを敵に知られないようにした、城門の外に造られた小さな広場のことです。北の曲輪からイナリ塚にかけての一带で、堀切をはさみ土塁や曲輪が入り組んでいます。

⑤ 武者隠し

城内に侵入した敵を迎え撃つために兵が隠れているための施設の一つです。
⑥ 堅壁、堅土塁
西側の沢に面する斜面は特に急な崖で、いくつもの堅壁やそれに接する堅土塁がみられます。これは攻める兵が横へ移動しにくくしたり、堀を攻め登る兵を迎え撃つためのものです。

何のために造られたお城だったの？

北本城は大きく平らな曲輪が中心に四つまとまってあり、日常的に城主が住み座光寺を治めるためのお城でした。このことは、発掘調査の結果、掘立て柱の建物は何回も建て替えられていたことからわかります。

これに対して、南本城は、周囲を土塁で取り巻く本曲

輪を中心に、いく段も続く腰曲輪や、堀切・土橋によって仕切られた小さな曲輪がいくつも構築されるなど、全城が防衛施設の固まりのようなお城で、防衛のためだけに築城されたと考えられます。中でも南西から攻めてくる敵への備えが多く造られていることから、座光寺の南隣、あるいはずっと南（あるいは西）側から攻めてくる敵を意識していたようです。ただ、南本城は尾根の先端まで完全に防衛のための施設が造られていないことから、ある緊急事態に対して短期間に、一気に造られたのではないかと考えられています。



堀切



土橋



馬出し



広城農道西側に残る北本城の堀跡

だれがいつ造ったの？

これまで、北本城・南本城ともに座光寺氏が造ったといわれていました。座光寺氏は、鎌倉・室町時代に天竜川の東側一帯を中心に勢力をふるった久知氏から分かれたもの、あるいは伊那市高途の藤沢氏から分かれたものなどといわれていますが、諏訪大祝家系の「神氏」の一族でした。座光寺氏はのちに武田氏（信玄）に従い、1575年（天正3年）に美濃の国（今の岐阜県）の岩村城で討ち死にして没落しています。

北本城は、発掘調査の結果、15世紀の後半から16世紀前半（応仁の乱頃から戦国時代にかけて）の陶磁器や土器が見つかったことから、その100年あまりにわたって続いていたことがわかっています。

南本城は、だれがいつ頃造ったか、いろいろな説があります。

- ① 北本城と同時期に座光寺氏が築いた。
- ② 武田氏の軍師・山本勘助が伝えたという「馬出し」や曲輪の並び方など、武田流築城法に特徴的な縄張り（城の施設の配置をいいます）が見られることから、「信玄ゆかりの城」の一つである。
- ③ 1582年（天正10年）に信濃の国（今の長野県）に攻め入った織田信長に備えて、武田氏によって築城された。

④ 徳川家康のもとで豊臣秀吉に対抗するため造られた。残念ですが、これらを裏付ける史料はありません。多くの謎にすぎた城として、私たちの想像力をかき立ててくれます。

地域とのかかわり？

江戸時代の記録によれば「本城山」と呼ばれた村有地で、「イナリ坂」という山道が通っていました。明治時代には「本城下草刈入札記録」があり、古くから新・柴拾いの森として地域住民に親しまれてきました。

また、江戸時代から秋葉社・伊羅皇大宮（御鏡社）・浅間社・豊川稲荷社・古賀比（查例）神社といった小さな祠がいくつも祀られていました。イナリ塚・小高稲荷社もありました。

籠の麻績神社とのかかわり？

神社が創られた年代ははっきりしませんが、「麻績神社」と呼ばれるのは1874年（明治7年）からで、それ以前は八幡宮・大宮諏訪社と呼ばれていました。「大宮」と呼ぶ例は飯田の大宮神社など少例で、その地域の中心的な神社をよぶ例が多いことから、古代伊那郡衛の「大宮」であった可能性もあります。また、南本城の大手としても重要な神社であったと考えられます。

（湯沢和行、校閲：馬場保之）

ご存知 城に見られる植物

ヤダケはいざ
戦という時に、
切って弓矢の柄
として使しま
した。また、マ
ダケ・モウソウ
チクなどは防
衛用の櫓や槍
の柄として
使いました。
(馬場保之)

ヤダケ

ちゅうせい 中世の人たちはどんな生活をしていたの？

鎌倉に幕府があれから鎌倉時代と、京都の室町に幕府があれから室町時代をあわせて中世といい、いずれも武士が権力を握っていた時代です。古代伊那郡部がすでになくなってしまっていたその時代、座光寺の人たちは、どのような暮らしをしていたのでしょうか。

ムラの姿

これまで行われた座光寺の発掘調査では、残念ですが中世のムラの様子がわかるものはほとんどありません。飯田市内でも、田圃遺跡・清水遺跡（松尾）や井戸下遺跡（川路）などがあるくらいです。井戸下遺跡では掘立て柱の建物が27棟と多く、他に4棟の住居があります。大きな建物のまわりに小さな建物があり、屋敷のまわりには溝が掘られています。溝の近くには池や便所があり、便所は溝を利用した水洗式のもので、田圃遺跡でも、同じように棟の方向をそろえる掘立て柱の建物のまとまりが四つあり、それぞれが溝でくぎられています。ムラではありませんが、このような建物がままとまっているところとして、北本城跡があります。あるいは、城の曲輪を小さくしたものが屋敷と考えるといかもしれません。

このほか、恒川の恒川遺跡群では鎌倉時代の住まいのあとが2軒発掘され、また高岡でも掘立ての建物や羽釜（かまどでご飯を炊くための鍋）が見つかります。遺跡群全体から中世の陶器などが出土していることから、広い範囲で人びとの営みがあったといえます。さらに、掘立て柱の柱穴は、恒川遺跡群ばかりでなく座光寺内のほかの遺跡、たとえば上の段丘上の遺跡からもたくさん見つかります。農家が田や畑の間に点在する、今日のような農村風景が広がっていたと考えられます。



北本城跡一保育苗建設地点で見つかった建物跡

高い段丘の上はどう開発されていったの？

平安時代のムラは、これまでの発掘調査では国道が通る下の段丘上で見つかっています。山の神の上でも灰釉陶器片が見つかるなど、やがて上の段丘でも人の活動がみられるようになります。では、上の段丘にどのように平安時代以降の人たちは進出していったのでしょうか。

伊賀良地区の殿原遺跡では平安時代の終わり頃に掘られたかんがい水路跡が見つかっています。こうした水路跡は、ほかに羽場地区や上郷地区でも上の段丘上で発掘されていて、平安時代終わり頃から中世にかけて水が得られにくい山麓の開発が進められていったようです。これらの溝と断面の形が同じ溝が、高岡の恒川遺跡群から見つかっています。こちらは、水路ではなく場所を区切るための溝ですが、奈良時代に掘られたものです。郡衙は飯田・下伊那の中心地であったところで、恒川遺跡群ではたくさんの鉄製の農具が発掘されていますから、当時の最も進んだ技術と道具で掘られた溝ということができます。そして、こうした技術によって少なくとも平安時代の終わり頃には、山麓の開発が進められていったと考えられます。



恒川遺跡群新屋敷遺跡 区画のための溝跡

どんなお墓に葬られたの？

高岡の新井原・石行遺跡では、新井原11号古墳のすそを中心に、長方形に掘りくぼめた穴に石がびっしりと詰まった集石墓とよばれる墓がいくつも造られています。遺体を土葬し上を石で覆ったもので、お経の中の1字を小石に墨で書いた経石が供養のために供えられています。中から見つかった陶器の壺などから、鎌倉時代の終わりから室町時代の墓です。この他、新井原・石行遺跡の飯田工業高校敷地では、火葬した骨を壺におさめたり穴に埋めた墓も見つかっており、六道銭を供えたものも多くあります。また、恒川清水でもおさまられたらしい火葬した骨や銭が穴から見つかっています。なお、お墓としては残っていませんが、鎌倉時代の絵巻物に描かれているように、一般の民衆の間では風葬などといった墓場に遺棄されたことがあったといわれています。

時代は江戸時代とくぐりますが、大門原遺跡で、火葬墓1基、土葬墓4基が発掘され、人骨のほか、『寛水通宝』やキセル（タバコを吸うための道具）などの副葬品が見つかっています。



新井原・石行遺跡の集石墓、経石

五輪塔と宝篋印塔

座光寺には、今も残る中世から近世にかけて作られたお墓（あるいは供養塔）があります。それは五輪塔・宝篋印塔とよばれる石塔で、恒川清水の周辺、高岡のお薬師様、宮の前、共和や刈野に残っています。恒川清水の

脇では五輪塔の上の部分か2つ発掘されています。

五輪塔は、平安時代の終わりごろから作られるようになります。多くは江戸時代にかけて、お墓や先祖などの供養のための塔として作られたものです。宇宙を構成する5つの要素という思想をもとに、下から方形＝地輪、円形＝水輪、三角形（あるいは屋根形）＝火輪、半円形＝風輪、宝珠形＝空輪からできています。

宝篋印塔も五輪塔と同じようにお墓などとして鎌倉時代の中ごろからさかんに作られるようになったもので、五輪塔とともにもともとは密教と深いつながりがありました。



恒川遺跡群出土の五輪塔（空・風輪）



宝篋印塔と五輪塔（恒川会場外地蔵）

白如鏡 しらやま 鏡

恒川清水の白山古墳は上に白山神社が祀られ、その信仰にかかわるものとして、発掘調査で出土した中世の和鏡があります。

鏡は面径4.7cmの「小型菊花文鏡」で、中央に素鈕があり、それを中心に背面いっぱい16弁の単弁菊花文が描かれています（16世紀後半）。

